

7章から12章までは大きな段落であり、その中で7章8章がエルサレム、それも神殿の境内を舞台にした一つの出来事である。季節は秋、仮庵祭。前回の9節までにおいて、主イエスはその祭に行くか行かないかの問答があった。

主イエスの兄弟たちが主イエスに向かって言っていることの大切な点は、「公にすべきことをひそかにしない方がよい」ということ。彼らは最後に「**自分を世にはっきり示しなさい**」と言っている。

この「**自分をはっきり示す**」とは、「**自分を現す**」「**啓示する**」という言葉（φανερῶω、パネロオー）。この言葉は、17章の主イエスの祈りの中で、「**世から選り出してわたしに与えて下さった人々に、わたしは御名を現しました**」という形で出てくる。更には、復活した主イエスが弟子たちに「ご自身を現す」という形で出てくる。つまり、非常に大切な言葉であり、主イエスがこれからはなされることを予め言っている言葉でもある。

そういう言葉を「**兄弟たち**」は発している。彼らは無理解、不信仰だけれど、彼らの言葉が、実は彼らの意図をはるかに越えた、神様の意図、神様が定めた「**時**」を指し示す言葉になっている。

今は、まだその時ではないことを彼らは知らず、主イエスだけが知っているが、主イエスはいつか公に、ご自身が誰であるかをお示しになる。ご自身を現す時が来る。そのことを彼らの言葉は、彼らの意図せぬ形で語っている。

前回のところでもう一つ、「**公に**」と「**ひそかに**」という言葉である。「**公に**」という言葉（παρρησία、パルレーシア）は他のところでは「**公然と**」と訳されており（7:26）、「**ひそかに**」（κρυπτός、クリプトス）は今日の箇所では「**隠れるようにして**」と訳されている。

ここで兄弟たちが語っている「**公に知らせる**」「**はっきり示す**」とは、肉眼の目に見える形で、主イエスが偉大な人間であること、奇跡を起こすことが出来るし、多くの人々の心をつかむことが出来る人間、今で言う「**カリスマ的存在**」であることを、広く多くの人に知らせるべきだという意味であろう。人目につかない田舎町でこそこそとやっていないで都に出よう。それも仮庵祭という過越祭に並ぶ大きな祭りで公に自分を示せば、すぐにもトップに登りつめることが出来る。そういう意図をもって、彼らは「**ここを去ってユダヤに行きなさい**」と言っている。

しかし、主イエスは2度、「**わたしの時はまだ来ていない**」と言って兄弟の求めを断る。その主イエスが次の10節によると、「**しかし、兄弟たちが祭りに上って行ったとき、イエス御自身も、人目を避け、隠れるようにして上って行かれた**」のである。

こういう書き方だと、主イエスご自身が一生懸命に身を隠しているかのような印象を与える。でも、そうではないだろう。主イエスは、兄弟の願いではなく、神様の意思に従って正々堂々と、**「公然と」**エルサレムの祭りに上って行かれた。その姿は誰でも目で見ることが出来た。でも、主イエスがエルサレムにおける仮庵祭に行かれることの中に何があるのかは、誰の目にも隠されていた。見えなかった。そういうことが、ここで言われている。

このことは7章から8章の終わりまでの流れを確認するとはっきりと見えてくる。7章1節からの表向きの文脈はこうである。ユダヤ地方には主イエスを殺そうとするユダヤ人がいたので、主イエスは**「ユダヤを巡ろうとは思われ」**ず、ユダヤに行きなさいという兄弟の促しを断っている。

しかし、実際には、主イエスは兄弟の促しとは別に、神様の促しに従ってユダヤの地、エルサレムに上っていかれる。その地には**「あの男はどこにいるのか」**と言って探し回り、見つけ出したら捕まえてやろう、そしてことと場合によっては殺してしまおうと思っている人々がいる。だから、主イエスは人目を避けているように見える。

そして、エルサレムの群衆たちは、主イエスが誰であるか分からず、漠然と**「よい人だ」**とか**「いや、群衆を惑わしている」**とか噂をしているが、彼らは、主イエスを殺そうとしている**「ユダヤ人たちを恐れて、イエスについて公然と語る者はいなかった」**のである。

しかし、それに対して主イエスは、**「祭りも既に半ばになったころ」**、多くの人の目につく**「神殿の境内に上って行って、教え始められた」**のである。まさに**「公然と」**(26節)活動をし始めた。だからこそ、25節以下で、エルサレムの人々の中には驚いてこう言う者たちが出てきた。

**「これは、人々が殺そうとねらっている者ではないか。あんなに公然と話しているのに、何も言われぬ。議員たちは、この人がメシアだということを、本当に認めたのではなからうか。」**

つまり、**「議員たち」**(ユダヤ教当局者・**「ユダヤ人」**)に捕えられて殺されることを主イエスが恐れているのなら、あくまでも人目を避けて行動するはずだが、主イエスは**「公然と」**語られる。公に、ご自身が誰であるかを語り始める。

そのことによって、主イエスを敵視する人々は、これから幾度も主イエスを捕まえて殺そうとする。でも、それが出来ない。まだイエス様の時が来ていないから。そして8章の最後の言葉。

**「イエスは言われた。『はっきりしておく。アブラハムが生まれる前から、「わたしはある。」』**すると、ユダヤ人たちは、石を取り上げ、イエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、神殿の境内から出て行かれた。

この8章の終わりの「身を隠して神殿の境内から出て行かれた」が、今日の箇所「人目を避け、隠れるようにして上って行かれた」に対応している。

この二つの文章が、仮庵祭、また神殿境内における主イエスとユダヤ人やその他の人々との一連のやり取りを囲む大枠になっている。その枠の中の最後の言葉は「はっきり言っておく。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある。』」(8:58)である。ここで主イエスは「自分は人間ではなく、神である」と言われている。それも「はっきりと」、「公然と」である。だからこそ、人々は神を冒瀆する者として主イエスを石打の刑で殺そうとしたのである。

でも、主イエスはそこでも「身を隠され」た。エルサレムにおける祭りに上るときも隠れていたし、祭が終わるときも隠れていたのである。まだ人々には、主イエスの姿、その本質は見えていないのである。

実際には、隠れるところなど何もない神殿の境内で、今まで目の前で話している人が突然身を隠すというのも、具体的な情景としては思い描けないことだが、ここでも主イエスの本質は誰にも見えず、また神様が定めた時が来っていない以上、人間が主イエスを殺そうと思っても、絶対に殺すことが出来ないという現実が語られている。